

新興感染症について

渡辺登喜子

大阪大学微生物病研究所感染機構研究部門分子ウイルス分野教授

はじめに

シリーズ「ウイルスよもやま話」の第7回目は、新興感染症の話題です。

人類はこれまでにさまざまな感染症を克服してきましたが、ここ数十年の間に、エボラ出血熱、エイズ(AIDS、後天性免疫不全症候群)、鳥インフルエンザ、重症急性呼吸器症候群(SARS)、中東呼吸器症候群(MERS)といった感染症が新たに人間社会に出現しています。最近では、2019年12月に中国の湖北省武漢市で新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が発生し、瞬く間に世界中に広がり、国際的に大きな問題を引き起こしています。これらは“新興感染症(Emerging Diseases)”と呼ばれており、「新しく現れた緊急対応を必要とする感染症」とされています。本項では主にウイルスを病原体とする新興感染症について述べます。

新興感染症の多くは、 人獣共通感染症である

新興感染症は、その多くが動物に由来する“人獣共通感染症(Zoonoses)”です。人獣共通感染症は「脊椎動物とヒトとの間で自然に伝播し得るすべての病気あるいは感染症」と定義されており、その原因となる病原体としては、ウイルス、細菌、リケッチア、クラミジア、真菌、原虫および寄生虫などがあります¹⁾。ヒトに感染する病原体のうち約60%が、人獣共通感染症を引き起こす病原体であり、また新興感染症のうち約75%が人獣共通感染症であるといわれています²⁾。人獣共通感染症は、動物からヒトに伝播した際に重篤な症状を引き起こすことがあるため、国際的に取り組むべき公衆衛生上の課題となっています。